

# 第10章 神のみことばの物差し～聖書を使って

2千年の昔、ユダヤからはじまり、全世界へ伝えられていったイエスさまの教えが、聖書典礼を通して私たちの日々の生活の中に生かされるためには、神のみことばをより深く知り、学ばねばなりません。

子供たちは、物語として読んだり、聞いたり、ビデオで見たりしていますが、日々の生活の中で聖書がどのようにかわりをもっているか体験させることが大切です。

第9章において神の国の歴史を物差しのようにイラストにして展開してみました。そしてその物差しの説明は、聖書に書かれていることを示しました。

この章はその物差しを聖書、57冊を並べて本の物差しとして見つめてみましょう。

○年齢 初聖体以上

○教材

・ポスター・横100cm、縦24cm（手本用と作業用）各1枚。

黄色のボール紙

・創世の書からヨハネの黙示録までの名前が書かれたポスター（写真①）

・本のわくと聖書のタイトルのわくだけで、何も書きこまれていない空白のポスター（写真②）

・本のわくの高さは各章の多少によって考える。

○タイトル 聖書（赤字）旧約の書、新約の書、モーゼ五書（律法の書）、歴史書、教訓書、預言書、福音書、使徒書、使徒の手紙、黙示書、57冊の名前、ペトロ1・2は一冊に、ヨハネ1・2・3の手紙は一冊に番号だけ。

○教えのねらい

神さまのみことばが書かれた本を聖書と呼び、たくさん本に分けられていること、しかし一冊の本として1ページずつ神の国の歴史の物差しになっていることを考えさせます。

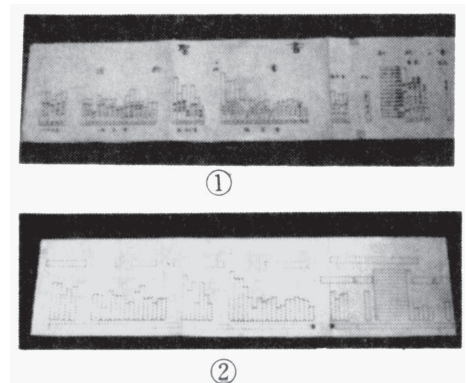
○作業

あらかじめ用意した空白のポスターに名前を書きこんでいく（写真①）

次号⑩で積み木の聖書で使用するので完成させておく。

○小冊子をつくる（書く）聖書

（1）私たちは聖書を手にとってみると、何世紀も前から今日まで、ヘブライ人たちと、キリスト教の人々が神のみことばによる啓示（ご自分をあらわすこと）として読まれてきた本であり、それを大切に守り、伝えてきた本であることを知ることができます。



- (2) この聖書は神さまが世界を創造された時から、神さまと人間と一緒に神の国の完成まで続けるように歴史が読みとられます。さらに、これからの将来の歴史についても私たちに語ります。神さまがすべてにおいて、すべてになるまで世界はもういちど新しくされ、人は神さまの栄光を歌い、永遠に神さまと共にいるようになるまで続きます。
- (3) 聖書を手に持ってみる時、私たちは最初に考えることは「聖書は誰が書いたのだろうか？」ということです。私たちは神さまが書いたと答えることができます。それは聖書に書かれているすべてのことがらを神さまが助け、導き、補い、霊のいぶきを送りながらたくさんの人々の手によってこの大切な本がつくられたからです。
- (4) 聖書が、着かれて本になる前には 人間の生きた声で語られました。昔の人々は自分たちが経験した出来事を若い人々に語り伝えました。神に出会った体験を次の時代の若者たちに神へと導く道を伝えました。
- (5) 人々は次第に色々な資料を集めるようになりました。ある人々はイスラエルの歴史について、エジプトからの脱出のようを語りました。また他の人々はアブラハム、イサク、ヤコブの太祖や有名な指導者たちについて、また礼拝の場所について語りました。
- (6) 次第に時代が過ぎ去り、これらの収集は段々と幅広く、豊かなものになりました。六世紀の終わりになって、始めの部分が一冊の本になりました。

ヘブライ人は、この書物を律法の書（トーラ）と呼びました。キリスト教徒たちは、モーゼ五書（ペンタテウコス）と呼んでいます。（写真③）

以下次章に続きます。



③